
ロード オブ ギャラクシア

蒼井水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロード オブ ギャラクシア

【作者名】

Z3338Z

【作者名】

蒼井水晶

【あらすじ】

永遠とも言える果てしなき世界を旅して、降り注ぐ幾億ものきらめき。

その一つ一つに、それぞれの歴史が綴られている事だらけ……。

これは、そんなきらめきの一つに記された、英雄達の物語。

少年は旅立つ。

その旅路の中で、仲間を、友を見つけていく。

しかし、その仲間達には美少女が多かった！？

架空の大陸を舞台に繰り広げられる、ドタバタハチャメチャバトルラブコメ（ハートフルボッコ）ストーリーが今始まる。。

プロローグ（前書き）

蒼井水晶初のオリジナル作品です。
拙い文章ですが、皆様が楽しんで頂けることを祈っています。

プロローグ

ここは、我々が住んでいる世界とは少し違う世界。
その世界の中央には、巨大な大陸があった。

『ギヤラクシア大陸』

それが巨大な大陸の名前である。

その大陸はその巨大さゆえ、果てを知らない。
いや、正確には果てが分からぬ、と言うべきか。
我々の世界より遙かに進んだ技術を持つてしても。

世界の果てには失われた楽園、伝説につたわれた楽園、『エデン』
があると言われている。

その見果てぬ夢を目指して、多くの冒険家が旅立つた。しかし、誰
一人として帰つては来なかつた。

この大陸には、様々な種族が住んでいる。

人間族、ドワーフ族、エルフ族……などだ。

今、この世界で繁栄を誇つてているのは人間族。
様々な種族を取り込み、肥大化して來た。

その人間達の主な大国は3つ。

『エンパイア帝国』、ロンバルディア大陸同盟、ドラクシル王国。

この対立する3つの国は、国が成立してから、幾度となく争つて來
た。

最大の国力を持つ『エンパイア帝国』。

最大の軍事力を持つロンバルディア大陸同盟。

最強の兵士と武器を持つドラクシル王国。

その特徴と、地理的条件も合わさつて、この争い合つ3つの国は決
着がついた事が無い。

現在進行形で戦争中のロンバルディアとドラクシル。

100年前の『ホルスの大逆』以来、不気味な沈黙を続ける帝国……。

増え続けるビースト達……。

そして今なお蠢く闇の勢力……。

この混沌とした時代に、光を降ろす者は現れるのか。
それとも、『エデンの伝説』が見つかるのか。

それとも、『狼の日』が訪れるのか。

神話を繰り返す様な予兆。

そして……、世界は揺れ始める。

そこに、1人の青年が旅立つ。

光という信念を心に秘め、新しい旅に出る。

仲間と出会い、友と戦う。

何を信じ、誰と戦うのか、

その運命は、自分で決めなければならぬ……。

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回にやつと主人公が登場します。

それでは。

第一話 青年（前書き）

今回はバトルになります。
ヒロイン1人目の登場です。

大陸の中央、やや下。

そこに帝国の首都、エンパイア^{エンパイア}・シティがある。

そこには、人間だけでなく、エルフもドワーフも、はたまた、獣人族といった種族まで、種々雑多な民族が暮らしている。

ただ、最近は傭兵崩れの連中や、盗賊などが流入してきているため、治安があまりよろしくない。

そのため、帝国警察はスラム街への見張りを強化しているとかいな

いとか。

また、テロリストへの対応にも四苦八苦させられている。

まあ、本格的にエンパイア^{エンパイア}・シティに攻め込むには、地方都市を突破し、外部城壁を突破し、無数の砲台や機関銃がついた城塞を打ち破り、内部城壁を破壊し、それでやつとこさ郊外へと辿り着く。

しかし、街一つが巨大な砦となっているため、突破するのは容易ではない。

エンパイアシティの中央、北西部。

治安が他の地域と比べると格段に良い。

帝国の観光地の一つである、エヴァンニ城があるのもここだ。

エヴァンニ城とは、帝国創世記の偉大な將軍、バルドー・エヴァンニ伯爵の名を取つた2つの城のことだ。

しかし、100年前の『ホルスの大逆』以降、ビーストの巣窟となつてゐるそうだ。

また、北西部には、若者が多い。

ここには、帝国軍術学校があるからだ。

帝国軍術学校、その大正門に青年は居た。
短い黒髪に狼を思わせる鋭い瞳。

細身だが筋肉質の体つき。

身長は170センチ前後だろう。

その瞳ゆえ、雰囲気に近寄りがたい物がある、といつわけでもない。
全体的に穏やかな雰囲気に包まれた青年だ。

腰にはロングソードと拳銃が揺れている。

彼は、大正門前で何かを思案していた様子だったが、思い切ったよう
に顔を上げると、セントラルストリートをゆっくりと西に向かつて歩き始めた。

30分ほどたつたのだろうか、同級生や先輩と挨拶を交わしながら歩
いていた彼が足を止めた。

そこには、アイテムショップがあつた。

ただし、強盗団に占拠されていたが。

彼は目を細め、強盗団の全容を仰ぎ見る。

人数は5人ほど。

傭兵崩れのようで、ボウガンやライフル、騎兵用のスピアをもつて
いるようだ。

中央に居たのがひげ面で大柄な男。

周りの連中より一回り大きく、腰に下げていたのは、ロングソード
ではなかつた。

グレートソード。それがその剣の名前。
両手で扱う大型の剣。

ロングソードの場合は、片手でも両手でも持てるよう柄が工夫さ
れているが、グレートソードは違う。その大きさのため、両手でし
か振るえないのだ。

しかも、力の弱い人でも斬る事は出来るが、振り回すことはできな
い。

それを振り回す事ができるのは力の強い者だけだ。

ちなみに、遺伝的に力が強く、寿命も非常に長い竜人族はこの剣を

好むらしい。

彼は、ショットップを包囲している警察の一群へ近づき、声をかけた。

「ここを占拠しているのは？」

「なんだなんだ野次馬か！邪魔だ邪魔だ、どけ！」

「大丈夫。俺は軍術学校の生徒です」

「ん……オホン！これは失礼した。何用かな？」

「ここを占拠しているグループは？とお聞きしました」

青年は響く様なテノール声で聞いた。

それに対し、警察官は、一度咳払いすると、報告書を読み上げた。

「アイテムショットップを占拠しているのは、元ロンバルディア軍所属の傭兵達だ。

今の一国間戦争はロンバルディアが優勢だ。大方、もういらなくなつて首を切られた、つてことだろうな」

「はあ……、はた迷惑な話だ。で、なんで突入しないんです？」

「それが、第一班と第二班は突入したのだがな、いいようにあしらわれて沈黙させられた。殺されてさえいない。あいつらはどうやら、ただの飲んだくれではないようだ。戦場をわたつて来た猛者達だろう

う」「なるほど……」

「どうするんだい？第三班はたつた今、全員沈黙した。我々は今増援を呼んでいる。機動隊が到着するまであと30分だ」

「俺が行つてみます」

「やめたまえ、君の様な実戦経験も無い若者に勝てる相手ではない」「案ずるより産むが易しつていうでしょ？問題ありません

「む……」

遙か東の島の諺を引用しながら言つた余裕綽々の笑みを見て、何かを感じ取つたのか、警察官は苦笑を見せ、『行つてこい』と手で示した。

「待ちたまえ！君の名前を聞いていなかつた。教えてくれ」

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

その言葉を最後に青年　　スタンリー・アークエッジはショップのドアを蹴破った。

「うつ……、酒臭え」

スタンリーは思わず鼻を押さえる。

仕方の無い事だ。そこには、『海賊の酒』と呼ばれる度数80度のドギツイ酒の瓶が転がっていたのだから。

今、傭兵崩れの盗賊団は絶賛酒盛り中だ。

不満そうな見張りの2人を除いて。

スタンリーは息を止め、足下にあつた酒の空き瓶を拾うと、ふつ、と息を1つ吐いて空き瓶を左の男に投げつけた。

「ぐあつ？！」

見事命中。

「どオした！！」

空き瓶の割れる音を聞いて、大柄な男を除く3人が駆け寄る。その駆け寄った隙に、スタンリーは乱雑に倒された商品の影へ身を隠す。

「また突入してきやがったのか、三度目はねえ！皆殺しだア！」

と見張り

空き瓶を投げつけられてない方が大声を出すと同時に、スタンリーは腰の拳銃を抜いた。

『ミリタリー＆ポリス・マークA』

それが拳銃の名前。

インペリアルガード
帝国防衛軍や、帝国警察に流通している実弾銃。

軍術学校で支給される銃だ。

かなり使い込んであるのだろう、銃全体が黒光りしていた。

安全装置を外し、残弾数を確認。

昨日マガジンを変えたばかり。問題は皆無。

一瞬の思考の後、発砲した。

放たれた弾丸は、大声を出した男の右の腕へと命中。

続けて放たれた弾丸は、右足、左足両方の太ももへ命中。たまらず、膝をついた所で、走つて来た勢いを乗せた右ストレート

がその顔面へ叩き込まれた。

「目標1、沈黙」

誰に伝えるとなく呟いて、次の男へと向かうスタンリー。その顔面にスピアが突き出された。が、それを半身になつてかわし、左足で踏み込みつつ、銃を握つた左拳を眉間に突き当てた。しかし、弾丸は発射されない。

ただ、男は脳震盪を起こし、気絶した。

「強い……！」

大柄なリーダー格の男が小声で叫び、凶暴な笑みを浮かべたのにスタンリーは気づかなかつた。

ボウガンを持つた男が一段回し蹴りを打ち込んでくる。スタンリーは地面と水平になるほど身体を反らせ、それを避けると、その体勢のまま、ジャケットの内側のホルスターからもう一丁銃を取り出し、男の胸に突きつけた。

『GANNER SINGLE HAND .45』

ガンナー・シングル・ハンド・45。それがその拳銃の名前。

45口径の拳銃。

赤子の時のスタンリーが入れられていた箱に入つていた拳銃であり、弾丸を自動で生成するという特殊な機構を持つ。

これを扱えるのはスタンリーしかいない。

この機構は現在の技術では再現不可能であるらしい。

「楽になれ」

その台詞と共に、左手に握られたフォーティファイブが吼えた。

その頃……。

外を包囲する警察官達はこの地区の警察署長の訪問をうけていた。

「状況は？」

警察署長が低い声音で問う。

「現在、軍術学校の青年が1人で戦闘中です。強盗団は3人が沈黙、1人が死亡の恐れあり。栄光ある我々帝国警察が1人の青年に鎮圧を任せるとは……、弱くなつたものです」

さきほどスタンリーの相手をした老警官が苦々しげな笑みを浮かべながら答えた。

彼は50歳を超えた大ベテランで、この現場の指揮を執つていた。
「ふむ……。そうか……。君がそう言うのならばそうなのだろうな」

警察署長も同じような苦い表情を浮かべた。
そして、後ろに隊員達へ顔を向けた。

「何をしている？！？」

突然警察署長 フランク・ドーウェーは激昂した。

後ろで茫然自失としていた、警察隊員に向かつて。

その憤怒の表情を向けて怒つた。

「何をしていると言つていい！誇りある我々帝国警察が、たかが5人の強盗団に撃破されたあげく、いくら軍術学校へ通つているとはいえ、まだ希望に満ちあふれた若い一市民を援護もせずたつた1人で突入させるとは何事だ！貴様らそんな事ぐらい上官の命令無くてもやらんか！！愚か者どもが！己の仕事と正義を果たせッ！」

一同はぽかん、と間抜け面をさらしていたが 真つ先に正氣を取り戻したのは荒事に慣れている機動隊の面々だつた。

表情が瞬く間に引き締まり、それまで動けずにいた自分達を恥じるようすに舌打ちをして、次々と突入を敢行した。

機動隊員が突入を始めたその時、スタンリーと最後に残つた男は睨み合つていた。

「ふはは……」

男が凶暴に笑う。

対して、スタンリーは無言で立っていた。

「強いた、少年。これでやつと俺は終われる」

男はどこか寂しげな笑みを浮かべていた。

「……」

「おいおい、なにか喋つてくれ」

「1つだけ聞く。ミリはどこだ」

スタンリーは足下でうめく盜賊を冷然と見下ろしながら言った。

「ミリ……？ ああ、あのガキか。奥だ。何も危害は加えていない。これは約束する」

スタンリーは名譽や金が欲しい訳ではなく、このを経営している家族と顔見知りであつただけである。

彼はここを経営している夫妻の1人娘、彼に懐いている少女が気にかかり、1人で飛び込んで来たのだ。

「店主と奥さんは……？」

「悪いが……」

男はそう言つて隅を顎で示した。

「……！」

スタンリーは声も無く驚く。

ギリリ。歯茎がきしむほど之力で歯を食いしばる。胸の奥底から沸き上がる感情は何だ。怒りだ。

ふがいない自分への怒り、後悔、憤怒。

俺はこんな俺を許してはいけない。

彼は怒りに身を任せた。

怒りは興奮へ。

恐怖を握りつぶす活力へ。

腰の長剣を抜き放ち、怒りのままにあり余る力で剣の柄を痛いほど握りしめる。

「おおおおおおおおつー！」

その怒りは抑えきれず、声に表された。

咆哮。

それと共にスタンリーは爆発的に地面を蹴り、駆ける勢いのまま相手の懷に突進した。

「ハアツツー！」

その突進をニヤリ、と笑いながら見、男は短い氣合いと共に青年の頭上に大剣を振り下ろした。

それを転がってかわす青年。

転がつて立ち上がったところに一段撃。大振りの薙ぎ払いと、突きのコンビネーション。

薙ぎ払いを身体を沈めてかわした青年は、突きを横に弾いて力のベクトルを横に受け流した。

「このガキ、腕が立つ。

一旦、飛び退いて体勢を立て直し、その青光りする剣をこちらへ向けて構えている青年を男は笑みをたたえて見返した。

普通、中途半端に腕が立つと俺の大剣を受け止めようとするが、このガキは受け流した。まともに受けたら剣がへし折れることに気づいたか。

まったく、初めてだぜ。俺の剣をかわすどころか、その特性まで見抜きやがった。

訓練、じゃねえな。こいつあ、『実戦経験』がある。

そこまで思考すると男は青年に声をかけた。

「おいガキ！名前は何だ？」

「あんたに教える必要は、ない！」

勇ましいねえ。

まるでそう言うかのように歪められた口は、男が戦場を駆け巡つて来た猛者であることを如実に示していた。

スタンリーは飛び上がりながら斬り上げる。

その華麗な斬撃を、男は口笛を吹きながら避ける。

スタンリーは返す手で、跳躍した状態から急速落下し、剣を男の頭

上に叩き付けた。

ガキンッ、と金属音が響き渡る。

「ハツ、いい動きしてるじゃねえか！」

口元に相変わらず笑みを浮かべながら男は挑発した。

「フン、お楽しみはこれからだ」

とスタンリーも笑いながら挑発を返した。

「行くぜ！」

スタンリーが繰り出したのは多彩な斬撃の連続攻撃。グレートソードが取り回しの良くない武器と一瞬で見抜き、強力な斬撃よりもこちらの方が効果がある、と結論づけた。

長剣の特性を十二分にいかしたコンボ攻撃は次第に男を追いつめていく。

しかし、手首を返す一瞬の隙を突かれ、剣を遠くへと飛ばされてしまつた。

「ガキが……。終わりだ」

男は剣を頭上に高々と掲げ、スタンリーを兜割りに一刀両断にしようとしている。

「スタンリーお兄ちゃん！！」

男は驚きの表情をして、奥の部屋に視線を転じる。

「ミリッ！…来るな！！！」

走り寄るかと思った少女に向かつて叫ぶスタンリー。

「チイッ」

男は舌打ちをして、剣を振り下ろした　が、弾かれた。一体何が起こった？

唚然とする男を田の前には、硝煙が煙っている銃口。何が起きたか。

それは、スタンリーが一瞬で腰のホルスターから『ミリタリー＆ボーリス・マークA』を抜き、剣の軌道に合わせて、撃つた。

そのことにより、振り下ろされる剣の力のベクトルは逆へと転換され、弾かれたと言つ訳だ。

「ゲームセットだ」

男が聞いたその言葉は、いやにゅうくりと空間に響いた。

ドドドドン！

バツクステップと同時にスタンリーは男の四肢へちょうど四発の弾丸を撃ち込んだ。

「ぐお……！」

地響きを立てて男が倒れると同時に、少女が飛びついて来た。

「ミリ……！大丈夫だつたか！？」

ミリ・ヘクター。

紫の髪を腰まで伸ばした155?ぐらいの小柄な少女。スタンリーよりも2つ年下の15歳。

懐いている、と言つよりは、好意を抱いていると言つた方が正しいのだが、スタンリーは自分に對しての好意に全くもつて気づかない超弩級の鈍感だ。

彼女からすれば『好き』なので、スキンシップをするのだが、スタンリーからすれば『妙に懐かれている』からスキンシップをされていると思つている。

この認識の相違は直すのに多大な労力が必要だ。

胸下の辺りに飛びついて来た少女の頭を撫でながら彼は言つた。

「うふ……、ミリは大丈夫、でも、グスッ、お母さんとお父さんが
うえええええん~！！」

15歳の子供には辛いだろう。

両親が2人とも殺されたのだから。

その苦しみは言語を絶するものがある。

俺には両親がいない。だから、この苦しみが分からぬ。だけど、デイビットが殺されたら、俺も泣くだろう。

彼は心の中でそう思つていた。

スタンリーは捨て子である。その彼を男手一つで17歳まで育て上げたのは教会地区のデイビット神父だった。

教会前に捨てられていた彼を拾い、育てた。

『デイビット』のことを頼んでみよう。なんとかしてくれるかもしない。

そう考へ、後は警察に任せて退散しよう、そう思つて『』の手を引き、階段へ向かつたところで、男が跳ね起きた。最初に瓶を投げつけられ、氣絶していた男だ。男は腰の剣を抜き放つてこちらに走つてくる。

「ミリ、伏せてろ」

「うん！」

少女を地面に伏せさせると同時に、懐のフォーティーファイブを抜き、身を屈めて敵の横薙ぎをかわすと、その顎へ向けて銃のバレルを突き入れる。

それと同時に、フォーティーファイブの銃口が火を噴いた。バン！

一発の銃声と薬莢の転がる音。

男は顎から頭にかけて撃ち抜かれ、即死した。

その動きを見ていた機動隊員が驚愕の表情を浮かべて呟いた。

『GAN= FIGHT……』

『GAN= FIGHT』とは、ここ5年ほどで急速に広まつた近接

戦闘術。

銃の射撃と軍隊格闘を高度に組み合わせた戦闘術。

ゼロ距離での射撃戦や、一対多数の戦いを制するために開発されたと言われている。

機動隊員にとつて、今、彼が見せた動きは驚きだった。

機動隊員は、軍術学校の生徒の『GAN= FIGHT』がこれほど の技術を持っているとは考へていなかつたのだ。しかし、彼の認識は間違つた。

外では、スタンリーについてのデータが送られて来ていたが、その一点を見て警察署長たちはあんぐりと口を開けた。

『GAN=FIGHT』の創始者と戦い、勝利した　とそこには書いてあつた。

「異常、と呼べるほどの闘争センス」

「あの青年は完璧だ。今の帝国軍人ならば万に一つも勝ち目はない」

「彼を鍛えた。彼ならば私を超えることが出来るだろ?」

そう、創始者の言葉が述べられていた。

「む……、奴らを取り押さえろ!」

フランク・ドーウェーはんぐりと口を開けていた状態から意識を取り戻すように首を振ると、高らかに命令を下した。

入口から青年と少女が出て来た。

それを見て警官達は万歳を叫び出す。

フランクも口に緩やかな弧を描く。

「良くやつてくれた。スタンリー君」

フランクは2人に穏やかに声をかけた。

「いえ、それより、ミリを教会へ連れて行つてよろしいでしょ?」

そのフランクとは対照的にスタンリーの拳は白くなるまでに握りしめられていた。

「それは構わないが……どうかしたのか?」

「いえ、少々自分が許せないだけです」

「……。今、報告を受けたが、彼女の」

とフランクは青年の横の小柄な少女を見下ろしながら深刻な表情で言った。

「御両親が亡くなつたとか。そのことについてだらう?」

「なぜ……、分かるのです」

「君の表情を見れば分かる。氣負わいでくれ。元はといえば我々

の責任だ。……すまなかつた

フランクはミリに向かつて深く頭を下げる。

「俺らはもう行きます。署長もお気をつけて

「うむ、ありがとう」

夕日に照らされて教会へと手をつないで歩く2人をまるで兄妹だ、
と思いつつ、フランクは彼らが教会に消えるまでその背中を見守つ
ていた。

第一話 青年（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は育ての親と、他のヒロインより一歩進んだ位置にいるヒロインを出します。

それでは。

第一話 教会（前書き）

教会を舞台に「ハラハラメ（なんだそりや）」が始まります。

いつのまにか夕方。

兄妹のように寄り添う2人は教会地区へと、燃えるような夕日のなか、歩いていた。

「大丈夫か？」

スタンリーは心配と安堵がないままになつた表情で、ミリへと声をかける。

「ミリはもう大丈夫だよ。お父さんとお母さんがいなくとも、お兄ちゃん達がいるから」

彼女は太陽のような笑顔を浮かべた。

なんて強い少女だろうか。

スタンリーはそう思つた。

この子の笑顔を曇らせるわけにはいかない。

彼はそう改めて決意した。

「ねえ、お兄ちゃん？ミリはこれからどうすればいいのかな？」

純粹そのものの瞳で聞いてくるミリを見て、スタンリーは思わず目が熱くなつた。

なぜか知らないが、とても切なくなつた。

凄絶な体験をしてもなお、純粹さを失わなかつたその瞳。

まるでこの少女がどこか手の届かないところに行つてしまつのではないか、そのような不安に駆られるほど儚く見えたその瞳。その力を入れたら、ポキリと折れてしまいそうな線の細い体。全てが淡い幻想のような、そんな気分にさせる。

思わずスタンリーは膝をかがめ、ミリを抱きしめていた。いま、抱きしめなければ彼女は霧の中に消えてしまう。そう、心のどこかで叫んだ自分がいた。

「お兄ちゃん……？」

いぶかしげに見上げて来たミリにその泣きそうな顔を見られたくない

くて、彼はミリの肩に顔をうずめて、震える声で繰り返した。

「「じめん、ミリ、「じめんな……」」

ミリは抱きしめられたまま、スタンリーの背中にさすさすと手を回

した。

「なんでお兄ちゃんが謝るの？お兄ちゃんはミリを助けてくれたんだよ？」

その彼女の優しさが痛かった。その彼女のぬくもりが切なかつた。

「「じめん…今だけでいいから…」」

ミリを抱きしめたまま静かな嗚咽を漏らした。

それに彼女が気づいていたかどうかは分からぬ。

しばらくたつて……。

「「じめん、情けないとこ見せちゃつたね。行こうか」

彼の口調は明らかにいつもより優しい。

スタンリーと同年代の少女達と喋るときと比べると、柔らかい。ミリ専用、というか、対年下用と言つか、包み込むような口調であった。

スタンリーはくしゃりとした、困ったような笑みを浮かべてミリを促した。

「うん！」

ミリは元気よく返事をして、また2人で歩き出す。

50㍍くらい歩いていたところで、スタンリーの体がぐらり、と揺れた。

「む……」

がくつ、と膝を地面につき、荒い息を漏らす。

「お兄ちゃん！？大丈夫！？」

「大丈夫。少し力を使いすぎただけ」

彼はそう言って、ジャケットの前ポケットから『ポーション』を取り出した。

『ポーション』

この世界で流通している体力回復薬の名称。

自分の最大体力の50%を回復することが出来る。

それを一気に飲み干し、「ふう…」と彼は息を吐いた。

「ゴミ箱はどこかなつと」

彼は通りを見回し、歩道に設置されていたゴミ箱にポーションのパックを捨て、歩き出した。

2人は教会に着いた。

スタンリーはドアを叩いて呼びかけた。

「デイビット！ 帰つたよ！」

1分ほどして、神父服を着て、白いひげを顎に蓄えた老人が出て来た。この老人こそ、スタンリーの育ての親、デイビット神父である。その落ち着いた風貌ハウントライハントと言動で、地区の人々から慕われている。

若い頃は凄腕の賞金稼ぎバウンティハンターだつたらしい。

「おお、スタンリー。怪我は無いか？」

「どこも。それよりや……」

「何も言つな。おまえの言いたいことはわかっている」

デイビット神父はその表情を見て、スタンリーの言いたいことがすぐ分かつたようだ。

さすが育ての親である。

「ミリ、良く生きててくれた」

そう言ってデイビット神父はミリを抱きしめた。

行動が似た者親子である。

「ミリ、良かつたらだが、この教会でスタンリーと共に暮らさないか？」

スタンリーが聞きたかったのはまさにこのことだ。

ミリを教会に住まわせてもいいか？

スタンリーはそれを聞きたかったのだ。

「ミリは大賛成！」

ミリは元気だ。

「俺は言つまでもねえよ」

スタンリーは、少し恥ずかしいのだろうか、頬を搔きながらそう言った。

「よし、決まりだな」

ディビット神父は緩やかな微笑みの中で2人の決定を見守った。これから祈りの時間だ。

スタンリーは祈りを終え、新しくミリの部屋になる場所へと向かった。

コンコンッ、と2つノックをしてから入る。

もし、ミリが着替えていたら大変なことになるからだ。

スタンリーには経験がある。

幼なじみと言うべきなのだろうか、彼女は孤児だった自分に差別の視線を向けること無く接してくれた。

彼女のしなやかな裸体を一度見てしまったことがある。もちろん、悲鳴を上げられた。

「どうぞー」

ミリじゃない？でもどつかで聞いたことのある声。

そう思ひしつつ、ドアを開けた。

「スー君？」

「ブフツ、「ごほつ、ごほつ、ごほつ」

スタンリーは、小さく吹き出してから、咽せた。

俺をスー君と呼ぶヤツは1人しかいない。

「やつぱり、スタンリーだあ」

フェルム・ヴェンジエンス。俺がつけたアイツの愛称はフリー。

そこにいたのは、栗色の髪を肩まで伸ばし、同色の大きな瞳をくりくりとさせている美少女。17歳。スタンリーと同い年。

「フリー、どうしてここにいる

吹き出したその表情をなんとか引き締めながらフェルムに問うスタンリー。

「もー、デイビットさんから聞いてないの！？掃除を手伝つて、だよー。」

あんの、馬鹿親父イイイ————！！！

スタンリーは心の中で育ての親を盛大に罵つた。

「わいい、聞いてないみたいだ」

「うん、わかつたよ」

彼女が、スタンリーに差別の視線を向けずに接してきた初めての人だつた。（育ての親のデイビット神父は除く）

そのせいか、それとも彼女の優しい性格のせいか、彼はフェルムに好意ではない、がしかし、明らかに特別な思いを抱いている。

『『アイツは俺が守らなきやいけないヤツなんだ』』

彼の脳裏に幼い日の誓いが甦つた。

その誓いは今でも変わらないよ。フェルムの親父さん。去年亡くなつた彼女の父親に心のなかでそう呼びかけた。

『『アイツは俺が笑顔にしなきゃいけない女の子なんだ！』』

デイビット神父にそう言ったことも甦つてきた。

懐かしいな。

彼は急に思い出した幼き日の記憶に対し、そう思つた。

いつの間にか、彼の顔には微笑が漂つっていた。

「もー、スタンリー、聞いてる！？」

「聞正在るさ」

2人は掃除をしながらたわいもない話で盛り上がつた。

俺にはやはり、フェルムが必要だ。

スタンリーはそう、誓いを新たにした。

その頃……。

デイビット神父はというと。

ミリの部屋のドアに、つまりは今2人がいる部屋のドアに耳をぴつ

たりと付けていた。

何やつてんだあんた？

部屋の中からは彼の息子と、娘のように思っている少女。

2人の楽しそうな笑い声がドア一枚を介して聞こえてくる。

彼らの笑い声を聞いて、『ティビット神父も穏やかに微笑んだ。が、

次に呟いた言葉はおよそ聖職者らしくないものだった。

「ここまで、お膳立てしてもくつ付かないか、むう、どうするべきか……」

おい、あんた一体ナニさせるつもりだ。

「しかし、見ててむずがゆくなるな、あの2人は「

スタンリーと、フルム。

互いが互いをとても大切に思いすぎているせいか、2人の関係は家族のような、友人のような、そして、恋人のような曖昧なもの。

そのため、このドアの向こうに広がっている空間は桃色と青つよつ、オレンジ色の空間だった。

「むう、いつそ既成事実を作らせてしまつか……？」

おい、あんた本当に聖職者か？

「やつぱり、（諸事情によりこの文章は削除されました）なことをさせんしかないか」

と、難しい顔でぶつぶつ変なことを口走る『ティビット神父。ここが教会じゃなかつたらあんただの変質以下略。

「じゃあ、そろそろお店の時間だからわたしは行く、だよ？鍵は閉めておいてねー」

花が咲いたような笑顔で頬み込まれたスタンリー。

「たくつ……」

スタンリーは呆れたような言葉を吐いたが、彼の顔は優しい笑みに彩られていた。

フェルムの満面の笑みでの『お願い』を彼は断れる訳がない。

フェルムはメアリーと一緒にウエイトレスと共に喫茶店を経営している。

父親の形見の喫茶店を譲り受けた形で出している。
ゆえに、経営者兼厨房担当兼給仕といつ、なにげに凄い女の子。
スタンリーはその喫茶店『キャンディ』でいつも朝食を食べる。
昼はフェルム特製の愛情弁当（つてオイ）を食べている。
夜は彼女が教会に来て手料理をふるまつたり、デイビット神父がつ
くつたり、スタンリー本人が作つたり、たまにだが、ミリが作りに
来たり。

ミリはああ見えて料理が上手く、プロ級なのだ。

ミリに『キャンディ』でお手伝いしてみたら、と進めようと思つて
いるスタンリーだった。

「どうしようか……？」

誰に聞くとも無く呟いた。

「寝るか」

つてオイ。そこそこベッドじゃないのか？

「……」

寝てやがる。

では皆さん、いきばんよう（おまえ誰だよ）

第一話 教会（後書き）

いかがだつたでしょうか？

次回は喫茶店『キャンディ』の話が主になります。
それでは。

第三話 喫茶店（前書き）

今回はスタンリーが少々不憫な目にあっています。

夜になった。

スタンリーはミリと共に、教会の向かい側、喫茶店『キャンディ』へ向かう。

『キャンディ』の中はいつも、柔らかな雰囲気が漂っているのだが、今日は違つた。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

見るからに軽そうな男2人が、ウェイトレスの服装 黒いロングスカートに白いブラウス、白いエプロンに同色のヘッドドレス、という格好をしたフェルムの腕を掴み、ナンパしていた。

かなり強い力で掴んでいるのか、彼女の顔が痛みに歪んでいる。「え、いや、あの仕事があるんで……ちょっと困るかなー？」

「じゃあ、仕事が終わつた後でいいから」

「え……いや、つその」

「じゃ、待つてるよ」

「アイツが痛がつてんじゃねえか。ブッコロス……！」

ミリは壮絶にイヤな予感がして、彼を振り仰いだが、時すでに遅し。「ミリ、ここで待つてろ」

そこにいたのは、ブチ切れすぎてなにかのメーターが振り切れたスタンリー。

怒れば怒るほど熱くなるはずの彼が笑う、これほど怖いことがあるのだろうか。

口元は綺麗な三日月を描いているのに、目は全く笑っていない。ここに良く来て、フェルムとスタンリーの関係 家族のよくな、友人のような、そして恋人のよくな。

その曖昧な関係を知つている常連客は震え上がつた。

「ねえ、お兄さん達……」

「あん！？ 何だテメエ！」

スタンリーは氷のような笑顔のまま、その肩をガシッ、と掴み、言った。

「ちょっとオモテ出ようか？」

なぜ、表がオモテなのかはだれにもわからない。

「吠えてんじやねえぞガ……」

バキッ。

チンピラがその言葉を言つ前に拳が突き出され、そいつは、鼻から盛大に血を噴き出しながら倒れた。

「テメエなにしやが ぶべらちつ」

またも言葉を言い終わる前に、今度は上段蹴りがもう一方の男に命中した。

スタンリーは2人の首根っこを掴み、ドアを足で蹴り開けて、表に出て行つた。

（ただいま、とても凄惨な光景が続いております。しばらくお待ちください）

「これで良しつと」

15分ほど時間が過ぎた後、いつもの状態のスタンリーが戻つて來た。

「お、お兄ちゃん、だいじょうぶなの？」

「ん？ ああ、問題ないよ」

いつもの穏やかな笑顔で答えるスタンリー。

「スー君、ありがと！」

とフェルムは彼の頬にkiss

おおお～つつ。

と『キャンディ』の常連客はびよめぐ。

「う…？」

ナニ、じゃなかつた、何されたのか自覚していないのか、スタンリー。

「ちょっと、疲れた。俺寝る
いやちょっと待て。

お前にここに来るまでも寝てただろ！

「じゃあ、向こうで食べる？」

と、フェルムが指をさしたのは、奥のVIPルーム（実際はスタンリー専用）。

「おう。そうする

「分かった。料理はいつものでいい？」

「俺はね。ミリはなにが食べたい？」

ちなみにいつもの、とはオニオングラタンスープと、ソフトフランスパン。そして、ミートローフ。

スタンリーはオニオングラタンスープが季節を通して大好物なのだ。

「え？ ミ、ミリも？」

今まで、スタンリーと話せなくて頬を膨らませていたミリは、いきなり声をかけられ、おどおどわたわっている。

彼女の微笑ましさに常連客も、2人の少年少女も頬を緩めた。

「ミリは、うーんと、スペゲッティ？ カルボナーラ？ にする

「了解だよー。少し待つてね」

フェルムが厨房に消えると同時にスタンリーとミリも奥の部屋へ消えた。

数分待つと、料理が運ばれて來た。

こんがりと焼けたチーズが食欲をそそるオニオングラタンスープ。

ふんわりしつとり柔らかなソフトフランスパン。

どっしりとしたミートローフ。

「うん、おいしそう。いただきます」

黄金色に輝くカルボナーラ。

「いただきまーす！」

「召し上がるー！」

スタンリーはゆっくりと食べていく。

ミツをそれに呑わせゆっくりと食べる。

フェルム自身も、肉団子スープとピラフを食べる。

「そういえば、」

ドアの向こうから3人の少年少女の明るい話し声が聞こえてくる。その楽しそうな声を聞いて、皆初老に手が届きそうな常連客達は優しく目を細める。

「若いっていいねえ」

「どうだねえ」

常連客達も、昔を思い返しているのだろうか、少し遠くを見つめていた。

「昔はあんなにちっちゃかったのになあ」

「ほんと、いつの間にか大きくなつたわよね~」

彼らはスタンリーに差別を向けず、『孤児』ではなく、『皆の子供』として、扱っていた。

その心が届いたのだろうか。

幼い頃のスタンリーのよつな、『デイビット神父』と『フェルム』以外全てを憎悪するような視線は無くなつた。

しかし、今でも昔の面影は残つてゐるようで、偏見を持った大人や同年代の少年達が向ける中傷に対してもその視線が復活する。

しかも、その視線は何倍もの鋭さを持つて突き刺さつてくる。さながらそれは鋭すぎて触れたら怪我をする氷柱のような、そんな視線だ。

昔のような狂氣は今でも彼の中にくすぶつてゐるのではないだろうか。

昔より遙かに濃密さを増して。

それが彼らの心配材料だった。

少し前。この喫茶店に若い帝国軍人が訪れた。

スタンリーの食事の世話をしているところだったフェルムを侮辱し、スタンリー本人を侮辱し、あらうことかデイビット神父まで侮辱した。

スタンリー本人への侮辱はともかく、家族の2人を侮辱されてスタンリーが黙つている訳がない。

修羅のような勢いで若い帝国軍人の手足を斬り落とした。そのときの彼の瞳は明らかに狂気に染まっていた。

なぜ常連客達はそう思ったのか。

それは彼の瞳がいつものように黒色ではなかつたためだ。

彼の瞳は 色に変化していた。

彼の瞳は ^{レッドアイ} 紅い目だつたのだ。

常連客達はデイビット神父に問いただしたが、彼は言葉を濁すだけで、何も教えてはくれなかつた。

しかし、今の彼にそんな雰囲気は全く感じられない。守ると決めた少女達と楽しそうに談笑しているだけだ。

常連客達は彼の誓いを知つてはいるが故に、なおさら優しい瞳でかれを見るのだ。

カラソカラソ、鈴が鳴つた。

「やあ、皆か」

入つて来たのはデイビット神父。

「やあ、こんばんは！」

「こんばんは、デイビット神父。壮健そうで何よりです、

その言葉に軽く手を挙げて応えるデイビット神父。

彼が教会地区でどれだけ慕われているか分かると言つものだ。

「スタンリー達は？」

デイビット神父はなぜか楽しそうな表情で聞いた。

「奥の部屋よ、デイビットさん」
どつぶりと太つた婦人が言った。

「む……、それでは邪魔するわけにはいかんな……」

デイビット神父が悪戯な笑みを浮かべていったその言葉に常連客達は大爆笑した。

彼らはデイビット神父の企みを知つてゐる。

すなわち『フェルムの思ひに報いてあげよう作戦』だ。

まあ、

苦情は後で受け付けよう。

その爆笑で誰か新しい客が来たのか、と気づいたフェルムが慌ただしく出てくる。

まるで護衛のように部屋からスタンリーも滑り出して來たが。

「デイビット！？」

スタンリーは驚いていた。

『教会の用事があるから、帰りは遅くなる』

と言つて出て行つたはずのデイビット神父。

まさか夜ご飯のうちに帰つてくるとは予想もしていなかつたのだ。

「速いなら速いって連絡してくれればいいのに」

スタンリーは拗ねたような表情をする。

いつも大人っぽいぶん、彼がたまに見せるこつした仕草は、彼をまだ17歳の少年だと示していた。

それに気づいたデイビット神父はますます笑みを深くして喋る。

「ん？ 何をするつもりだったんだ？ フェルムでも連れ込む気だつたのか？」

「なつ！？」

スタンリーは顔を真つ赤にする。

助け舟でも出してもらうかと、彼が横を向くとフェルムが「はうう

……』とつて真つ赤になつてゐた。あ、湯気まで出ていた。

「そ、そ、そんなわけないだろつ！」

なんとかして絞り出した言葉はめちゃくちゃにじもつていてた。

「じゃあ何だ？ ミリを抱き枕にするつもりだったのか？」「

そう、彼がミリのベットで仮眠をとっていた時、その真横にミリが入ってきて一緒に寝ていたのだ。

小さいくせして、なかなか大胆なことをする少女である。

デイビット神父は、彼はその時寝ぼけていた、という大事なところは言わなかつた。（そこが一番大事だらつ！）

ちなみにミリはスタンリーより早く起きて、腕の拘束からなんとか脱出していた。

「…………あー！もう！」

スタンリーは頭を抱えた。

この馬鹿親父イイイー！！

ついでに心の中で罵つておいた。

「ふふ、冗談だ」

デイビット神父のその言葉を聞いて、からかわれたと氣づいて凍結したスタンリーが解凍されたのは5分後である。

解凍方法はミリのチヨップ、その名も『ミリチヨーネーップ』だった。

「私には、モーゴレムのカツレツのAセットを頼む」
デイビット神父は凍結させた自分の息子を尻目にゆづりと注文していた　自分の息子の名前で。
何とずる賢い聖職者なのだろうか。

「わかりました、だよ。少しあ待ちください」

ちなみにモーゴレムとはビーストの一種で、かなりおとなしい性格。その肉と乳は美味なため、家畜で飼われたりしている。

一言で言つなら乳牛と肉牛を足して二で割つた感じのビースト。捕獲も簡単で、こちらが攻撃を仕掛けなければ攻撃をしてこないというほど、凶暴が代名詞なビーストではおとなしい種。

「いただきます」

デイビット神父は優雅な動作でカツレツを食べ始めた。

その間にスタンリーと美少女2人は奥の部屋へと戻つている。

スタンリーはこれから寝るのだが、フェルムと一緒にいるところよ

としたイベントが起きる。

彼らの関係性と、フェルムの服装。

すなわち、膝枕だ。

フェルムはスタンリーを膝枕すると、状況にもよるが、必ずと言つてもいいほど歌を歌う。

それは、この大陸では有名な子守唄だった。

第三話 噙茶店（後書き）

いかがだつたでしょうか？

次回は『子守唄』についての話です。
それでは。

第四話 勇者への予告願（ララバイ）（前書き）

今回は伏線の登場を何ヶ所か暗示しています。
それを探してみてください。

第四話 勇者への子守唄（ララバイ）

場所は奥のVIPルーム。

そこでは、スタンリーがフェルムに膝枕されていた。

ちなみに、ミリは常連客に呼び出され話し相手をしている。

「悪い、しばらく寝かしてくれ」

スタンリーは、その言葉を最後に轟沈。

その寝顔を優しい笑顔で見つめ、髪を梳いた後、フェルムは透き通るような声で唄い始めた。

『私の勇者よ、空を見上げよ、星々は唄うよ、眠れ眠れ、静かに』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて』

『私の勇者よ、闇の中を照らせよ、そこには、幾千の時の声』

『その歌は、光の中に、眠れ眠れ、と響く』

『悠久とこしえの中で、宿命を忘れて』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて』

『私の勇者よ、必ず私に、ただいま、と』

『私の勇者よ、必ず私に、ただいま、と』

その美しい歌声は常連客達にも聞こえていた。

「勇者への子守唄ララバイ……」

誰か一人がそう呟いた。

「私も良く唄つたものだ……」

「ディビット神父が懐かしむように天井を見上げる。」

「え？ ディビットさんがですか？」

太った婦人が驚いたように聞く。

「うむ。スタンリーが小さい頃にな、寝れない時にはいつも唄つてやっていたんだ」

『彷徨い果てて、私の横に倒れ込む』

『そんな君が、愛しくて』

『崖っぷちでもいい、君を愛してる』

『君のために、祈り捧ぐよ、君を愛してる』

『星々の導きで、出会えたのだから』

『君の帰る場所はここだから』

『ずっと、ずっと、待っているよ』

「あれ？ 2番になると『私の勇者』から、『君』に変わってる？」

常連客の1人が不思議そうな顔で呟いた。

それに答えるように、デイビット神父が語つた。

「この子守唄の起源はとても古い。大陸神話に出てくる勇者の物語の頃からだ。大陸神話が成立したのが約1000年前と言われている」

「る」

「へえ〜」

「大陸神話では、寝ている勇者をシスターが膝枕して唄つたのが最初と言われている。その後、2人は愛し合つようになつた、と伝えられている。2番の歌詞は魔王を討伐しにいく勇者が、疲れきつてしまし、シスターの祈りでまた立ち上がり、それを見送るシスターを表しているのだ」

「なるほどー」

常連客は皆、感心したように頷く。

1人が奥の部屋を覗いた。

そこでは、フェルムが唄いながら、スタンリーの頭を撫でていた。

彼女は微笑み、そつとドアを閉めた。

「気持ち良さそうに寝てますよ、スタンリー君。まるで子供みたいに」

「まだあの子は子供だつに」

デイビット神父は訝しげに言つ。

「違いますよ〜。まるで、小さい子供みたいな寝顔なんです」

「あの子にとつては、フェルムの膝が一番の枕だからな……」

呆れたような、優しいような、判別のできない微妙な表情を浮かべるデイビット神父。

「そうですねえ。もつ、いいかげん、付き合つちゃえばいいのに

太つた婦人がそう言うと、その場にいた全員が「うんうん」と言わんばかりに頷いた。

ちなみにミリはといふと、一瞬にして2人を覆つた、オレンジ色の空気に取り残され、ふてくされていた。

2人の出す空気は、バカツブルのようなピンク色の空気ではなく、名をつけるならば、サワヤカツブルと言うべきだらうか。

この地区に子供は少ない。まあ、若い夫婦もいるし、教会内に孤児院もあるのだが、大体が初老をすぎた男女や、退役軍人だ。もっとも、退役軍人はスタンリーを嫌つて出て行つてしまつたが。その空き家には、『キヤンディ』の常連客達の知り合いが次々と引つ越してくる。

その知り合い達は、別にスタンリーを嫌うような人間達ではない。むしろ、スタンリーとフェルムを微笑ましく見守るような、そんなあたたかな人達だ。

この地区は帝国の首都の地区といつよりは、教会を中心とした1つの国と言つべきだらう。

また、スタンリー本人も、フェルムや教会の子供達を守るために、この地区唯一の賞金稼ぎとして、活躍していた。

凶暴なビーストには、一体につき、『ゴールド』と、賞金がかけられる。

この世界の通貨は『ゴールド』と呼ばれている。記号はGだ。

そして、一種類のビーストを一定数討伐すると、『ハンターポイント』といつものが与えられ、『ランキング』が上昇する。

この『ランキング』は、今までに稼いだ『ハンターポイント』の総数で決められる。

スタンリーの場合は、稼いだ賞金額はまあそこそこ高いが、『ハンターポイント』は今2500ポイントぐらいしかたまつていませんがと云つと、スタンリーに入つてくる討伐依頼は、同じビーストを駆逐することが多いからだ。

しかも、ビーストとしての強さは最低ランクの依頼ばかりである。例えば、逃げ出してしまつたモーグリムの排除、同じく家畜のポークリム　大きな豚のようなビーストの暴走を止める、野生化したコケッカー、つまり鶏を巨大化させてダチョウと2で割つたようなビーストの討伐。

ちなみに、モーグリムは牛、ポークリムは豚、コケッckerは鶏と表記する。

たまに出現する凶暴なビースト　リーフライ、ビーストタートル、ボーンビーストなどとランクの最低クラス　を始末するぐらい。それでは『ランキング』が上昇しないのもしかたないだろう。

フェルム達とこの地区を守れるだけでいい。

このときの彼はそう思つていた。

しかし、運命は彼を放つておかなかつた。
その呼び声はすぐ側に迫つていた。

1週間後、スタンリー達軍術学校の4年生達は、一度軍属を離れ、実戦経験と言う名の旅へと放り込まれる。

この旅で命を落とす者もいる。

ちなみに、その旅路で仲間になつた者は、帝国に居住権が与えられると言つらしい。

しかし、彼はまだ知らなかつた。

この旅から、彼自身の秘密が明かされていくことを。
彼はまだ知らなかつた。

自分がどんな運命を背負つていてるのかも。
彼の始まりが告げられる旅まで後一週間。
運命を告げる鐘の音は彼に着実に近づいて來ていた

。

第四話 勇者への予告願（ララバイ）（後書き）

いかがだつたでしょうか？

次回はたびたび物語中にでてきてる、『帝国軍術学校』での一コマです。

それでは。

第五話　過去？（前書き）

予定していた軍術学校の話まで進みませんでした。
田測を誤りました。

ごめんなさい。

今回はスタンリーの過去が一つ明かされます。
彼は一体どんな宿命を背負っているのでしょうか。

第五話　過去？

小鳥のさえずりが聞こえる。

少し開けられたカーテンから田の光が差し込む。

スタンリーの顔を日光が直撃し、彼は顔をしかめながら伸びをする。

「つづくん」

横で誰かが寝返りを打つた。

スタンリーは起こさないように慎重に掛け布団を少しだけ剥ぎ、その誰かを確認する。

その『誰か』は、フェルムだった。

しかも、寝間着はワイシャツ一枚というラフな格好。ボタンの上の3つが止められていないため、彼女の肌があらわになりそうになる。

スタンリーは自然とその胸元に視線が行ってしまう。

「つづ……」

自分の思考に気づいた彼は小さく舌打ちすると、自らの本能の叫びを押さえつけ、布を引き裂くごとく田縁を引き剥がし、体を軋ませながら、フェルムに背中を向けて息を整え、壁にかけてあった口腔ソードを手に取ると、教会の庭へと出て行つた。

そういう状況にあっても、手を出さない男のことを紳士と言いつつ、一方ではヘタレと言つ。

教会内の庭の立木。

それには無数の傷がついている。

猫が爪研ぎをした訳でも、鹿が角を打ち当てたわけでもない。そこにはあつたのは無数の刀傷。

この教会で剣を使うのはスタンリーのみ。

この立木はスタンリーの訓練の相手だった。

およそ10年前、この地区には1人の退役軍人がよく来ていた。

彼はデイビット神父とは旧知の間柄らしく、名前で呼ぶほどに親しい友人だった。

まあ、デイビット神父のほうが、彼より一回り年上なのだが。

彼は、退役軍人には珍しく、幼いスタンリーをかわいがった。

何時の日かは定かではない。

幼いスタンリーが木の枝で遊んでいるのを見、彼は驚きの表情を浮かべた。

彼は、横にいて、スタンリーを見守っているデイビット神父に訴えた。

「孤児は全部預けた。お前はそう言つたわ、『デイビット！』

彼の怒りの声に対し、デイビット神父は緩く首を横に振った。

「あの子は、孤児ではないのだ」

「何だと……！？どういう意味だ」

「詳しく述べる。だが、あの男の友人のお前なら察することがで
きるやもしれんな……」

「まさか、あの少年は……、『あの男』の息子なのか？」

「……」

沈黙したデイビット神父に対し、彼はスタンリーを観察した。

スタンリーが拙い回転斬りを見せた時に一瞬見えた紅い瞳に彼の眼
は釘付けになつた。

「彼の眼の色は、赤い。どういうことだ？」

誰に問うとも無く独り言を言つて、彼はしばらく考え込んでいたが、
何かに合点したのか、「まさか……」の一言の後、顔面を蒼白にして、
デイビット神父に問いかけた。

「まさかあの少年は、『アレ』なのか……！？」

それに対するディビット神父は厳しい表情で頷き、続けた。

「あの子の戦闘センス、いや戦争本能というべきか……、違うな……」

「戦争センスと言つべきだな……は異常だ」

「後に『ガン』ファイトの創始者にも見抜けられることになる、異常。^{アブノーマル}それすでに、ディビット神父は見抜いていた。

「なぜ分かる……？」

「この前、暴走したコケッターを、たまたま持っていた木の枝一本で殺したのだ」

「なつ……！」

彼はあまりの驚愕に眼と口を見開いた。わずか7歳の少年が暴走したビーストを武器も無しに殺した。それは、異常な戦争センスを持つてさえ、有り余るほどに奇怪なことだ。

「どうやって殺した？」

「木の枝の尖つた部分をコケッターの眼から脳へと貫き通した。それだけだ」

「……」

彼は無言で考え込んでいた。

この事はもはや、異常ではない。一人いれば戦場の劣勢を覆すレベルのものだ。^{ノットイコール}これまで彼の思考は辿り着いた。

この時、彼は自分もその、圧倒性を持っていることを皮肉にも忘れていたが。

「ぬう……」

彼は唸り、空を睨んで考え事をしていたが、スタンリーが遊んでいる庭へと出て行つた。

「スタンリー。剣に興味があるのか？」

木の枝を振り回すのに夢中になつっていたスタンリーは急に声をかけられ、びくつ、と震えた。

スタンリーが恐る恐る顔を上げると、そこには雲をつぶよつた大男が。

まあ、小さい頃の話だ。

実際には、その男は帝国軍人の平均身長+10?ぐらいの身長だったのだが。

スタンリーは知らない男 しかも退役軍人の服装をしていたを見ると、その目に凄まじい憎悪が灯った。

そのどす黒い眼の色は、歴戦の勇士であつたその男さえも一步後ずさるしかなかつたものであつた。

まるでこの世のすべてを憎悪するような視線。

彼はその視線に耐えながら、口を開いた。

「まあ、そう警戒するな。俺はデイビット神父の知り合いだ」

その口からデイビット神父の名前が出ると、幼いスタンリーは少し警戒の色を緩めたようだつたが、まだこちらに近づこうともしなかつた。

幼い子供にはあるはずのない、過剰な警戒心。

それをもたらした者は何なのか、と考えつつも、スタンリーが近づこうとしないので、こちらから近寄り、頭を撫でようと手を伸ばした そこでスタンリーの体はギュツ、と硬直した。

口は一文字に結ばれ、まるで痛みに耐えているような表情。その表情に彼は絶句すると、少し離れ、スタンリーの体を見回した。よく見ると、スタンリーの体には薄い牡丹の花のようなものがいくつもあつた。

殴られた癌……か。

帝国には、『孤児は災いの元』として嫌う、彼にとつては忌むべき習慣がある。

生まれて來た子供に罪は無い。

彼はそう思つていた。

故に、この地区に來た時、孤児院を開設したのだ。

彼はもう一度スタンリーに近づき、頭を撫でた。

スタンリーはきょとんとして、彼を見上げた。

「俺は、スタンリーの味方だぞ?」

笑みを浮かべながらそう言つてやると、やつとスタンリーは無邪氣

な笑みを返した。

彼は立木にスタンリーを向かわせ、後ろから手を添えてやりながら、剣を指導した。

指導しながら、彼は見守っているディビット神父に、親指を立てた。ディビット神父は苦笑し、親指を立てると、教会の礼拝堂へと、戻つていった。

幼いスタンリーと彼の稽古は日が落ちるまで続いた。

その日の夜。

ディビット神父の部屋で、男2人は話し込んでいた。

「驚いたぞ、カルシウス。君があんなことをするなんてな」「必要な気がした……、それだけだ」

その言葉を最後に、男2人は黙つて酒を酌み交わし続けた。

カルシウスと呼ばれた男、この男がもし、教会から出て、セントラルストリートを歩いていたのならば、通行人はじよめき、窓から男達が顔を出すだろう。

この男は、『騎士団総団長』カルシウス・シグマー。後に、『戦士王』と呼ばれる男だ。帝国軍のすべてを統括する男でもある。ようは、帝国軍の最高司令官だ。

彼を凌ぐ命令権を持つものは、この国の人、すなわち、皇帝その人しかいないのだ。

彼は、別に退役軍人でもなんでもない。

今もつて現役だ。

お忍びでここに来て、開設した孤児院の子供達の笑顔を見るのが、楽しみだからだ。

そこに、弟子の指導も加わった。

彼の口はいつの間にか、笑みを形作っていた。

ちなみに、現在、カルシウスに剣の腕で勝てるものは帝国内ではない。引き分けるのは1人。今カルシウスの目の前にいる男。

すなわち、デイビット神父だ。若い頃の凄腕の賞金稼ぎの剣の腕は今もつて衰えていない。

勝てそうなのは、『伝説』と謳われ、『ランキング』でトップに立つ、2人の男の『共通の友人』。

そして今、逸材が1人見つかった。

彼を超えていく若い力を1つ見つけた。

その結論に同時に至つた2人は、不意に大笑いした。

カルシウスは、1週間に1回、稽古に来るようになった。

めきめきと腕を伸ばして来る幼いスタンリーを2人は笑みをたたえて見守つていた。

第五話　過去？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回こそは軍術学校の話にしたいと思っています。（予定）
それでは。

第六話 戦女神（ブリュンヒルト）（前書き）

かなり長くなりました。
3人目のヒロイン登場です。
しかし、主人公と共に旅はしません。

第六話 戦女神（ブリュンヒルト）

立木に斬り込んでいく。

上段からの斬り下ろし。

袈裟斬り。

払い斬り。

斬撃から刺突へ、刺突から斬撃へ。

教えられた動きに自分で考へた動きを組み合わせながら立木に向かつて剣を振るう。

右からの踏み込み。

左からの踏み込み。

バックステップから素早く踏み込み、大振りの一撃。

胸元に剣を構え、剣先を立木に向ける。

突進片手平突き。

敵に高速で突進し、放つ強力な突き。

スタンリーの得意技の1つだ。スタンリーはその突進力を利用した高速移動で無数の突きを放つたあと、ファニーチュで強力な突きを打ち込んだ。立木が抉れる。

スタンリーはジャンプし、素早い3連斬り。

その後、空中に跳躍した状態のまま、縦回転斬り×3。

その反動で少し空中に浮き上ると、スタンリーは空中から地面に急速に落下し、剣を叩き付けた。

この1日前、強盗団のリーダーと戦つたときは両手で叩き付けたが、今やった技は片手である。

スタンリーは立木から距離を取ると、腰を沈めた。

突進片手斬り払い。

これもスタンリーの得意技の1つだ。

強烈な突進から繰り出す斬り払い攻撃。

高速の突進から繰り出す強力な突き。

そしてそこから派生する無数の連続突き。

そのどれもが大陸剣術には存在していないものである。

スタンリー本人が、剣の師匠であるシグマーに勝つために編み出した剣の技だ。

もちろん、動きの基礎はシグマーから習つたものだが、スタンリーの剣術はシグマーのそれとは全く持つて似ていなかつた。

『剣の動きというのはその人々の性格や個性が反映される、故に基礎は同じでも、1人1人の剣は全く違うのだ』

これがシグマーの持論であつた。

スタンリーの場合は、左右からのステップ（踏み込みとも言つ）から繰り出される連続攻撃を出していたかと思えば、

敵を空中に打ち上げる強力な斬撃を放ち、空中で剣を振り回したかと思つたとたん、地面に剣を叩き付けるなど、変幻自在に技を繰り出す。

少し距離が開いていると、強力無比な突進技が襲つてくる、など剣を使うからと言つて油断できる相手ではない。

さらには、『GAN= FIGHT』も創始者を超える強さで習得している。

しかも、彼には自分の中で一番強い、と自負している斬撃がある。地面と水平にした剣を腰へ持つて来て、剣先は己が背へと導く。腰をすこしじだけひねる。

右手一本で柄を持ち、左手は鎧へ軽く添える。俗にいう居合の構えだ。

東方の島国から伝わつた一撃必殺の斬撃。

しかし、東方の島国の剣は反りがあるので、大陸の剣には反りがない。

本場のように、鞘から抜き打ちにバッサリ、というわけにはいかない。

だから、自らの体を鞘に見立て、精魂を込めて一撃。

立木はひとりわ高く音を響かせて、近くにいた鳥がそれに驚いて飛び立つた。

スタンリーは持つて来ていたタオルで汗を拭う。

もう季節は七月だ。

この庭に来たときのような早朝はまだ涼しいが、訓練を続け、太陽が昇つてくると、教会内の庭はムンとした熱気に包まれる。体を鍛えるのは気持ちがいいが、この暑さはどうにかならないのか。そう思考しつつ、シャワールームへ足を向けた。

途中、礼拝に来た老婆に声をかけられた。

「こんな暑いのに稽古かい。精が出るねえ」

スタンリーは会釈しながら差し障りの無いように答える。

「はい。ありがとうございます」

スタンリーと老婆はすれ違つたが、去るスタンリーの背中へおばあさんの声が追つてくる。

「水分補給をちゃんとするんだよ〜」

スタンリーは振り返らず、「はーい」と答えて、小走りでシャワー

ルームへと急ぐ。

スタンリーはまた、老爺とすれ違い、如才なく会釈をするが、老爺はスタンリーを存在しない、と言わんばかりに無視をした。

彼は目の前の老爺を殴り飛ばしたい衝動に駆られるが、それをなんとか堪えて、やうに速度を上げる。

スタンリーは熱いシャワーで汗を流してから、男物の香水をつけ、下着を着て自分の部屋へと戻つた。

彼は黒いバトルスーツの上下に身を包み、その上からジャケットを着る。

なぜこのクソ暑い夏にジャケットを着ているのかと言つと、そのジ

ヤケクトは彼のトレードマークだからだ。

ジャケクトの背中には、狼の横顔が縫い込んである。

デイビット神父曰く、赤子のスタンリーを狼が見つけたとかなんとか。

そのため、彼のトレードマークとして、狼が選ばれたのだ。

彼は教会の祈りを終えてから、喫茶店『キャンドゥ』へ向かった。

「おはよう、スー君」

フェルムが満面の笑みでスタンリーに声をかける。

「おはよう、フィー」

スタンリーも穏やかな表情で声を返す。

相変わらず2人の世界を作るのが速い。

それを見ていた常連客達は猛烈な背中のかゆみに襲われた。

『早くあの2人がくつ付けばいいのに』

あまりの2人のむずがゆさに背中のかゆみが出て来たのだ。

「おはよー。お兄ちゃん」

少し眠そうな顔で厨房から出て来たのはミリ・ヘクター。

彼女に対し、スタンリーは驚いた表情で言った。

「なんでミリがここに？」

「ミリはお姉ちゃんの喫茶店を手伝うことになったの」

とミリは言つてまた厨房に引っ込んだ。

スタンリーは疑問符を頭に浮かべたままだが、どうにか自分を納得させる。

「おはようございます。スタンリー」

「どわあー?」

スタンリーは後ろから声をかけられ、飛び上がった。

「ふふ、私です」

そこには、豪奢な金八、じゃなかつた豪奢な金髪の髪をロングにした女性が悪戯な笑みを浮かべて立っていた。

「メアリーさんか！あー、驚いた」

スタンリーは顔見知りだと分かると、一気に体の力を抜いた。

彼女はここで働いているウェイトレスなのだ。歳は19歳。ちなみにフラグは立っていない。

幼い頃に植えついた警戒心はなかなか通常には戻せないものだ。

「メアリー、なにやつてるの！？手伝つて、だよ」

「ごめんなさい、呼ばれているみたいで。あなたのお姫様に」

「だ、誰がお姫様だつ！あいつは、別に…その、ああ、もう！」

スタンリーは顔を真っ赤にして反論しようとするが、結局音に乗せられて言葉となることは無かつた。

その自分に焦れて頭を抱えるスタンリー。

それを悪戯な笑みで見るメアリー。

戦闘では強くとも、女性には優しい紳士な性格が災いしたのか、スタンリーはメアリーには頭が上がらないのだ。

しかし、スタンリーはフェルムや軍術学校の女性達のことにについて相談するのはデイビット神父ではなく、このメアリー女史なのだ。いつもはスタンリーをからかつたり、そのスタイルの良い体でスタンリーを真っ赤にさせたりと、悪戯を繰り返す彼女だが、眞面目な場面では頼りになる。

まさに、近所の頼れるお姉さんのような感じの女性だ。

それに対して、スタンリーは振り回される弟という感じだろうか。

フェルムとスタンリーとは違うが、微笑ましさを感じさせる関係だ。

「メアリー、早く来てよー」

フェルムの声がまた聞こえる。

「ちょっと待つてー。今注文取るからー」

「はーい」

しばし奥に向かって話した後、メアリーはスタンリーに向き直つた。

「『注文は、ヒーローさん？』

もちろん、悪戯な笑みを浮かべたままで。

「あなたは普通に人の名前を呼べないのか！？」

スタンリーは突進して来る猪もかくやといつ勢いでツツ「ミ」を入れた。

「えー、だつて、スタンリーはフェルムがピンチのときは必ずと言つていいほど出現するじゃん」

「そうですか？」

「自覚してないのかしら……？」

メアリーは額に手を当て、ゆるゆると首を横に振つた。

「まあ、いいわ。ご注文は？」

「マフィンのAセットで」

「はい、注文はいりまーす、マフィンのAセットです」

メアリーは厨房に向かつて叫ぶと他の常連客の元へ注文を取りにいった。

数分後、朝食が運ばれて來た。

焼きたてで湯気を上げてゐるマフィン。
カリカリに焼かれたベーコンと半熟卵。
コーンの冷製スープ。

以上がAセット。

「いただきまーす」

「召し上がり、だよ」

もちろん、朝食を運んで來たのはフェルム。

朝食を食べるスタンリーの顔をズーっと見つめている。

スタンリーが視線を感じて顔を上げると、また眼をそらす、ようなことを、何度も何度もやつていた。

ちなみに、フェルムの顔は赤い。

それに気づいたスタンリーは声をかけた。

「オイ、どうした？」

「ひやー!?」

フェルムは奇声を上げて椅子を倒した。

「い、いやその、ただ、男の子だなーって思つて……」

テンパリながらもなんとか絞り出したその声は小さかった。

「は？」

それをなんとか聞き取ったスタンリーも彼女の発言の意図が分からず、首を傾げていた。

「だから……うう、か、かつこいになつて！」

フェルムが真っ赤になりながら言つた。

「そ、そつか、あ、ありがとう……」

美少女に『かつこい』と言われて喜ばない男はいない。

スタンリーも顔をトマトのように真っ赤にして礼を言つた。なぜ彼女がこんなにもテンパっているのか。

それは朝にさかのぼる。

朝、スタンリーが日課の訓練に行つてしばらくたつたあと、フェルムは寝ぼけまなこで眼を覚ました。

天井がいつもと違うことに気がつき、訝しげに体を起こす。そのとき、布団に男物の香水の匂いを感じた つまりはスタンリーの匂いを感じてフェルムは飛び起きた。

「うわわ！？？わたし、どうしてここに！？」

彼女は教会内の部屋で寝ていたのだが、なぜか寂しくなり、スタンリーの部屋に寝にいったことは現時点では覚えていなかつた。

「やば、うわー！こんな格好でスー君の横にいたなんて！？どうにかなつちやうよ～！～！」

心臓が凄まじい速さで鼓動を続けている。

それはそうだろう。

好きな男の横で一緒に寝たのだから。（決していかがわしいことは起こつておりません。普通に寝ただけです）

幼なじみのような曖昧な関係とはいえ、意識するものは意識する。寝ている時に抱きついたたくましい背中の感触とか、無邪気な寝顔とか。

いつの間にかスタンリーはかつこよく、凜々しくなつていたのだ。

小さい頃から一緒に遊んでいるために、なかなか気づかなかつたが、スタンリーは剣の稽古を始めてから、めきめき身長とかも伸びて來ていた。

もうさすがに止まつたようだが。

昔、ビーストに襲われたときも、背中に庇つてくれた。彼は大きな傷を負つてまで私を守つてくれた。

変質者に追いかけられたときも、彼が追い払つてくれた。フェルムを何度も命がけで助けてくれたスタンリーは、フェルムにとつて、『私の勇者』^{ヒーロー}なのだ。

自分を卑下することが多いスタンリーを励まし、支え続けて來たと言つ自負が自分にある。

だから、絶対に付き合つ。

と朝に決意を固め、喫茶店で会つたのだが、昨晩背中に抱きついた時の映像がフェルム脳内劇場で何度もリピートされ、一人で真つ赤になつっていたのだ。

「フィー。おい、フィー！おーい、フェルムー」

「うわーい！？」

「お前どこに飛んでつてたんだ。そんな幸せそうな表情して」

あなたの背中に抱きついたときを思い出しました、なんて口が裂けても言えないだらう。

「時間だ。行つてくるよ」

なお、フェルムが再起動しないため、スタンリーの昼食はミリが渡しましたとや。

場所は変わつて、帝国軍術学校正門前。

スタンリーはそこをぐるりとしたその瞬間……背中からタックルを受けて倒れた。

なんとか、地面とキスする事態は避けられたが。

「よお！スタンリー！昨日は大活躍だつたんだつてなー！よつ、色

男ー！」

快活そうな顔つきをしたこの灰色の髪の青年は、エリック・フリント。17歳。

スタンリーの親友で、帝国軍術学校の実技では次席だ。筆記は酷いものだが。

「お前いつまで背中に引つ付いてやがんだ！さっさと離れろ！」「ドゴォンッ！……、人を殴るにはおよそありえない音がした。スタンリーが銃のバレルでエリックのこめかみをぶん殴ったのだ。

「ぐへつ！」

エリックは吹っ飛んで、後ろに来ていた女子生徒のスカートの下へと偶然潜り込んだ。

「え、きやあああああつっつ！」

悲鳴。

エリック、鼻血を出しながら親指を立てる。

「何やつてんだ……！」

スタンリー、跳躍して、重力落下を乗せた膝落としを打ち込む。

「ゲベツ！」

エリック、悶絶する。

スタンリー、その反動で女子生徒の方に倒れ込む。

女子生徒、スタンリーを抱きとめる。

「スタンリー様あ

女子生徒、なぜかうつとりとした表情でスタンリーを強く抱きとめる。

スタンリー、胸に顔をうずめる。

「むー、むー、もがー！」

周りの男子、妬む。

「スタンリーの野郎オオオオ！」

「やはり、『細身で程よい筋肉』じゃないとモテないと云うのか！」

？

「いや、彼が紳士で優しいからじゃないかな。それに女子生徒のピ

ンチのときはなぜかかならずいるし、大体（ここから先はスタンリーに対する愚痴が延々と続いたために省略させて頂きます）

「何をやつてるんですのオオオーーーーー！」

スタンリーが窒息しそうになつたそのとき、蒼い髪を風になびかせ、

1人の女子生徒がすごい勢いで走つて来た。

彼女は背中にしようつていた大剣を抜き、剣の腹で、思いつきりホームラン斬りをした。

「よし、今日も一日愉快に過ごせ、なほべばつ！」

エリックはまたも吹つ飛んでいき、女子生徒も竜巻に飲み込まれたかのようにすつ飛んでいった。

「うおつ！？」

スタンリーだけは、マト ツクスよけをして無事であった。

「あぶねえなつ！何すんだ！クリスティーナー！」

「スタンリー、無事でしたのね！」

その天然発言に、スタンリーは。

「お前が一番危ないわつ！」

ツッコミをいれた。

「まあ、そうお怒りなさらずに、行きましようスタンリー」

スタンリーと彼女 クリストイーナは腕を組み、スキップするような足取りで、中へ入つていった。

クリスティーナ・アルフルフ。

帝国の貴族の1つである、アルフルフ家の長女である。

帝国貴族にはめずらしく、慈善事業や福祉、孤児の保護に力を入れており、帝国国民の信を得ている。

次期皇帝は、アルフルフ家の当主ではないのかといふ噂が帝国議会で囁かれている。

その関係で、クリスティーナはスタンリー達が暮らしている教会の孤児院に訪問したことがある。

その時、スタンリーはフェルムと一緒に孤児達の世話をしていたが、彼女の姿を見ると、冷たい眼になり、フェルムに「あとは任せる

と言つて、ビースト討伐へ向かつた。

クリスティーナはフェルムにスタンリーがなぜあんなに冷たい態度をとるのか聞いてみると、彼女はこう答えた。

「彼は、この国の上流階級を憎んでいるんだよ。小さい頃に殴られたり、タバコの火を押し付けられたりしたからね」

そのフェルムの言葉にクリスティーナは絶句してしまつた。

その後も、クリスティーナは教会の孤児院に足を運び、スタンリーと会話の糸口を掴もうとするが、彼は自分が来るたびに外へいつてしまう。

しかし、転機が訪れたのは、ちょうど10回目の孤児院訪問のときだつた。

城塞の内側、つまり内城壁の外側は安全なため、子供達を遊ばせていたのだが、ビーストが出現した。

『ボーンビースト・ソードタイプ』

その名の通り、体が骨で出来てゐるビースト。

個体によつて違いがあり、この地方に出現するボーンビーストは石剣を持つてゐるため、『ソードタイプ』と呼称される。

それが3体現れた。

彼女はこの時、自分の装備である、グレートソード大剣を持つていなかつたため、丸腰だつた。彼女は女だてらに大剣を振り回すことが出来るのだが、さすがに丸腰では勝てるほど強くない。

絶体絶命の危機のとき、スタンリーが空中から、ビーストに飛びかかり、その動きを止めた。

3体を1太刀で倒したスタンリーの剣の刃えに、彼女は眼を剥いた。

「な、なぜ、助けてくれたのですか！？」

スタンリーは彼女の顔を見ようともせず言った。

「別に……ただの気まぐれだ」

クリスティーナからは見えなかつたが、ホッとした表情を浮かべていた。

「そうですか……」

その真意に気づいているのかいないのか、クリスティーナは笑顔を浮かべていた。

「とりあえず戻りましょ。またビーストが来てもまよいですので」

「ええ」

教会に戻り、自らの屋敷に戻る所としたクリスティーナをデイビット神父が引き止めた。

「クリスティーナ君、もう戻つてしまつのかね？」

「ええ、あんな事件もありましたし、彼には嫌われているらしいです」

「スタンリーのことか……」

クリスティーナが沈んでいる表情を見せる所、デイビット神父は少し考え込み、言った。

「助けられたとき何か言われたか？」

「ええ、私が『なぜ』と問い合わせたら、『ただの気まぐれ』だ、と言つてましたが」

クリスティーナがそう言つと、デイビット神父は笑顔を見せた。

「なら問題はない。それはスタンリーの照れ隠しだ。あの子は少々ぶつきらぼうなのでな。安心した顔を見せたくはなかつたのだろう」「ではなぜわたくしと話そうとはしないのです！？」

クリスティーナはもつとも気になつていてそれを告げた。

出会つたときから彼に惹かれていた彼女にとって、もつとも重要な問題だ。

「あー。それは多分、貴族のお嬢様と話したことないからじゃないか？」

「わたくしと何を話せば良いのか分からぬ、と言ひましたのですのつか？」

クリスティーナの勢いに苦笑しながら、デイビット神父は「行つて来たまえ」と手でスタンリーの部屋を示した。

「ンンンンッ！」

ドアのノックを2回。

その間に息を整える。

「どーぞ？」

スタンリーの氣怠げな声が聞こえた。

疲れているのかと心配しながら、クリスティーナは恐る恐るドアを開けた。

「失礼します……」

そろそろと自らの部屋に入つて来たクリスティーナを見て、スタンリーは疑問符を浮かべる。

「ああ、あなたか。何か御用ですか？」

ベットに寝転がっていたスタンリーが言つ。

「い、いえ……先ほどの礼をと思いまして……」

クリスティーナは俯きながら言つ。

「ははっ！礼なんていりません」

スタンリーは初めて笑つた。正確には、クリスティーナと話していれる時に始めて笑つた。

その快活で少年のような笑みにクリスティーナの心は引き込まれた。

「いえ、でも……」

まだ俯いているクリスティーナに対し、スタンリーは笑つたまま言った。

「むしろ礼を言つのはこちらのまつです。チビジモの世話をしてくれてありがとうございます」

その言葉にやつと顔を上げたクリスティーナ。

「いえ、これも良い経験になりますので」

とテンパリながら出した言葉は貴族の責務、のような言葉だつた。

「何をそんなに緊張しているのです？あなたの方が身分が上なのですが？」

そう訝しげに聞いて来たスタンリーに「あなたのこと」が気になつてゐるのです」などとは言えないクリスティーナは、

「……、と、殿方の部屋に入るのは初めてですの」と返すのが精一杯だつた。

「そうですか……」

その言葉を最後に沈黙が部屋を覆う。スタンリーにとつては苦でもなんでもなかつたが、色々と焦つているクリスティーナはなんとか会話の糸口を掘もうと、こう切り出した。

「そう言えば、自己紹介をしていませんでしたわね。申し遅れましたが、わたくし、アルフレドルフ家の長女、クリスティーナ・アルフレドルフと申します」

と言つて美しい礼を見せたクリスティーナにスタンリーは見惚れていが、彼女がこちらを見てくるのに気づき、咳払いをしてから、自己紹介をした。

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

スタンリーは貴族式の礼など知らないので、知つている最大限の礼騎士道に乗つ取つた例をした。

それに対して、クリスティーナは「あら?」と声を上げる。その視線に気がついたスタンリーは相好を崩して言った。

「俺の剣の師匠が騎士なのです」と。

クリスティーナが次に聞いたのはどこの学校に通つているかだつた。

「帝国軍術学校」と答えたスタンリー。

その返答に喜色満面の笑みを浮かべ、「同じ学校でしたか!」と喜ぶクリスティーナ。

それから2人は学校の話で盛り上がつた。

スタンリーは彼女が学校で5本の指に入る実技成績の持ち主だと知り、非常に驚いた。

その美貌と立ち振る舞いから、『戦女神^{ブリュンヒルト}』と異名を持つことも、恥ずかしいのか顔を赤らめながら聞かせてくれた。

クリスティーナにとつては、彼の性格が自分の思つていたよりずっと穏やかなものだと知つて、さらに気になる男性となつた。彼の立

ち振る舞いのなかに覗く芯の通つた確固たる信念も彼女にとつて心地の良いものだった。

2人が話を終えたのはもつ、太陽が山の向こうへ沈んでしまった時間だった。

「もうこんな時間です。お送りします」

スタンリーがそう言って椅子から立ち上がる。

「え？ あ、そうですね」

クリスティーナは名残惜しそうにスタンリーの部屋を見回し、伸ばされたスタンリーの手を取った。

教会の、子供達の『また来てね』という声に見送られながら、教会地区の入口まで来た。

「では、お気をつけて……」

「ま、待ってください。わたくしに対しては敬語は禁止です！ わたくしのことも呼び捨てで呼ぶことひー！」

「は？」

急にそんな事を言われたスタンリーはきょとん、とするが、数秒でなんとか理解し、了承した。

これがスタンリーとクリスティーナの出会いの結末であった。

クリスティーナが懐かしい出会いの記憶に思いを馳せているとき、全校集会ではスタンリー達を見送る、として1対1の実戦訓練大会が始まることが決定していた。

第六話 戦女神（ブリュンヒルト）（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は実戦訓練の模様を書く予定です。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338z/>

ロード オブ ギャラクシア

2011年12月20日18時47分発行